

れる様に努力したい。

演題14. 乳歯癒合歯保有者の顔貌の特徴—モアレトポグラフィ法による3次元解析—

○印南 洋伸, 野坂久美子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

先に、癒合歯を保有する小児の乳歯列弓形態の特徴について報告したが、今回はその形態が顔貌にどのような影響を与えているかを知るために、モアレトポグラフィ法を用いて検索した。研究対象者は乳歯列正常咬合者男女各50名と、下顎前歯部に癒合歯を保有する男女各25名、総計150名である。モアレ写真はフジノンモアレカメラ FM 3013を用いて撮影し、その解析に当たっては、カールツァイス社製画像解析システム IBAS - 2000 と、今回新たに開発した、モアレ画像解析用のソフトウェアを使用して、三次元的、定量的測定を行ない、次の結果を得た。

顔面の各計測点間の距離について。1) 正常群では鼻翼点間距離、鼻上点—頤点間距離、ならびに頤下点から下顔面部の各計測点間距離において、男子は女子に比較して有意に大きい値を示した。2) 癒合歯保有者は男女ともに、正常群に比較して、下唇頤部の領域を示すモアレ縞の幅が有意に小さく、同部が後退していた。

顔面の左右の対称性について。1) 正常群、癒合群ともに、口唇周囲の領域で非対称性が大きかった。しかし、正常群と癒合群を比較すると、癒合群の下唇頤部における非対称率はより高く、それは面積や、凹凸の度合いを示す形状係数、ならびに断面積/周長の比において有意差を示した。2) 全領域におけるモアレ縞の水平断非対称率も、男女ともに正常群に比較して癒合群が有意に大きな非対称率を示した。3) 癒合歯発現部位別では、非対称率に有意差を示したのは、下唇頤部の形状係数においてであり、片側性A B癒合群が両側性癒合群に対し、有意に大きい値を示した。また、他の計測項目では、癒合歯の発現部位による有意差はみられなかった。これは、癒合歯の発現部位や形態だけでなく、上下顎の咬合関係による影響がおおきいものと思われた。

演題15. 総義歯装着患者の頭部エックス線規格写真分析について
—残存歯槽堤の形態と咬合平面との関連—

○平松 浩, 熊谷 啓二, 宮林 耕平
柿沢 利枝, 柏崎 潤, 虫本 栄子
田中 久敏

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

無歯顎患者の補綴治療において、義歯を装着し咀嚼機能を回復するためには、有歯顎者の形態を参考にして義歯を構成するのみでは種々の問題があると考えられる。特に、歯牙が全部欠損していることから、顔面骨の形態が有歯顎と大きく異なるため、歯牙の喪失に伴った経時的な頭蓋、顔面骨形態の変化と総義歯の咬合関係の変化との関連を検討し、無歯顎患者の補綴治療に参考となる指針を得る必要がある。

しかし、歯牙の喪失に伴った経時的な頭蓋、顔面骨形態の変化と総義歯の咬合関係の変化との関連については、十分な研究がなされていない。そこで、今回我々は、総義歯装着者41名の頭部エックス線規格写真より、頭蓋、顔面骨形態が正常と判断された無歯顎患者における歯槽骨形態の違いと、人為的に設定された総義歯の咬合平面との関連について、解剖学的ランドマークを計測、分析し、以下の結果を得た。1. 無歯顎患者を顔面頭蓋の形態、特に、上下歯槽堤の形態と形態から3型に分類できた。2. 仮想カンベル平面に対し義歯の咬合平面は後方で離開し、後方離開型、前方離開型は有歯顎者より後方に離開していた。3. FH平面に対し義歯の咬合平面は、平行型、後方離開型、前方離開型の3型とも近似していた。

演題16. 顎関節内障における関節円板に関する研究
—特にMR画像について—

○関 浩二, 小早川隆文, 青村 知幸
加納 良, 土井尻康浩, 佐藤 仁
岩田 信浩, 笹原 健児, 大屋 高德
工藤 啓吾, 藤岡 幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

今回、われわれは、MR画像を用いて顎関節円板の位置および形態を観察し、関節円板形態変形の分類を試みた。対象は、1989年より当科を受診し顎関節内障と診断され、難治性と思われた症例、18例24関節、平均年齢31.4歳であった。MRは閉口位、最大開口位にて撮像し、形態分類は閉口位での形態を基準とした。